

このようなワークシートを作成した。

これを見れば一目瞭然。「民衆」という言葉が頻繁に使われている。

つまり、民衆の定義を筆者の話の流れに沿って頭の中で整理させなければならない。

早稲田大学の入試問題の難しさの理由ひとつとして問題文の要約だけでは答えを導けない

とすることが上げられる。

単純に消去法など、解法のテクニックだけでは解答を導けるような問題が少ない。

ここで頭に入れておかなければならないことは出題者の本文の読み取りである。

独特のバイアスがかかった表現になっている部分に対応しなければ答えにたどり着けない。

問一の選択肢の中で「民衆は欠けているもの、現存しないもの」という部分を「いまは(姿を見せて)いない」という言葉に置き換え、プロレタリアートの「革命をおこす」という部分を「社会を(変える)可能性を持った」という言葉に置き換えている。「民衆の発見に貢献する」という部分も「民衆」として捉えるという表現に置き換えている。

これが早稲田のやっかいなところだ。受験生を困惑させるばかりではなく、時には本文の解釈に歪みを生んでいる。

問二は「プロレタリアート」がどのような民衆かということに考えが及べば答えは推測できる。労働者＝抑圧されていたに気づけば良い。かなり陳腐な問題である。受験生に点数を与えようとしたのだろうか？

問三は、「民衆」は単に見えるものとして表象されたのではないと言う部分が「映画に映っているのは民衆そのものではなく」に対応し、「現実的な理念であり、理想的な現実なのである」が「ある思想によって民衆として映し出されている」に対応すると気づけば答えは出せる。しかし、この答えを多くの受験生が短時間で見極めるのは困難だろう。

問四第三段落で、西洋外の「第三世界」の映画作家たち→古典的「映画」と古典的「民衆」は欠けていて新たに発見しなければならない。(欠如)と筆者は述べている。この部分が「潜在性」があるがゆえに、「潜在性」として「現実的」だと実にまどろっこしく述べている部分の説明と出題者が考えていることに気づくことが重要。

問五吉本隆明の引用文から漢字二字で抜き出せという出題なので、だいたいの受験生は「動因」を抜き出せるだろう。しかし、政治にとって「民衆が欠けている」ことは、政治の存在理由にかかわり、政治こそは民衆を求め、また何らかの民衆が、ある政治を求めていることを意味しているという部分を説明している問題文は理由を答える文(～から。で終わっている)だから受験生は戸惑うだろう。素直に傍線部の理由を説明した以下の文章の空白部に入る語句を漢字二字で答えよ、としなければならないだろう。ここへ来て、やっと筆者の言いたいことが芸術や映画ではなくて政治と民衆であることに受験生が気づく部分なのだからもっとしっかりした設問にするべきだ。

問六「団結や連帯のような有機的な意識」とあるので「帰属意識」が答えとなる。

問七第十段落の(砂粒のように分散した個人からなる)たえず浮動する集団から一定の方

向性を持たないというイメージにつながって来る。

問八 第二段落に書かれているプロレタリアートのような革命を起こせる可能性を持つ民衆が筆者の望む民衆であることに気づけば答えは絞られる。